

Ghost Stories and Strange Phenomena in Dramas
by Mokuami Kawatake, Their Change after the
Meiji Restroration (3) : The History of Japanese
Ghost Stories in Modern Literature (10)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三浦, 正雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/183

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



黙阿弥の幽霊と怪異、維新以後の変遷（続々）

— 日本近現代怪談文学史 10 —

三浦正雄

5、(1)「北条九代名家功」

「北条九代名家功」は、芝居の現場の知識の無い学者や有識者が提唱し、九代目市川団十郎が乗り気であったため、黙阿弥によって書かれた活歴史物の作品である。原作は『太平記』巻第五「関東田楽賞翫の事」であり、全三幕、1885年（明治17年）11月東京猿若座で初演された「新歌舞伎十八番」の一つである。

原作と比するに、どちらも天狗が出現するのであるが、そこに至るまでのくだりが異なっている。安達泰忠が北条高時の愛犬を殴り殺し、高時から死罪を申し渡される、愚かな為政者をより具体的に描いたくんだりには黙阿弥が創作したものである。一方、原作で、天狗事件の後に、闘犬にふける高時の愚かさの描写が羅列されているが、こうした事象の羅列はセリフの中にも見られず、具体的な場面描写によって表現されている。黙阿弥は、太平記の記述を整理してドラマとして有効な形に再構成したものと思われる。

北条高時は、愛犬を殺した安達泰忠を死刑にしようとするが、

大仏貞直と秋田延明に止められ思いとどまる。しかし、この事件により興が冷めたため、愛妾の衣笠をはじめとする侍女たちの勧めにより、催馬楽を歌い舞う。この歌舞の際に風で灯火が消えたため、侍女たちに灯火を持つてくるように命じ、侍女たちが取り行っている間に天狗が現れる。

ところが、高時には、天狗が、自分が各地から呼び寄せた田楽法師にしか見えない。

りるへ興に入りたる折こそあれ、一吹き吹き来る小夜風に、燈火一度に消えければ、

ト風の昔になり、燭臺の燈火一時に消える、これにて窓蓋をおろす。

高時 烈しき夜風に燈臺の燈火を一時に消したるか、早う燈火を持つて来よ。

四人 はッ、畏りました。

りるへ燈火消えて物凄き闇を照せる電光に、衣笠はじめ怖氣立ち、打連れ奥へ入りにける。

ト風の昔仕掛にて、日覆より舞臺へ稲光する、これにて
女形皆々びつくりなし、廊下より下手屋體へはひる。

へ跡に高時空打ち仰ぎ、（ト高時空を見上げ思入あつて、）

高時

秋の習ひといひながら見る間に空も搔き曇り、冴え行く月の影もなく物の黑白も分らぬに、池中へきらめく電光は、節の替りに雷鳴なすか、はて物凄き空合ぢやなあ。

ト脇息に掛り居る、これにて大薩摩になる。

摩大薩へそれ一迅の風に連れ、空は忽ち磨墨を流せる如く雲震ひ、

電光かゞやく縁側へ、實に高時が驕慢の、心に魔魅の附入りてか、虚空遙かに飛び来る天狗。

トドロくくのやうな風の音稲光りあつて、下手日覆より

頭巾半面羽根を負ひし天狗一人、早ぶさにて二重下手へ下りる。

りるへ妖魔の術に惑され田樂法師と高時が、目には見ゆるか打ち悦び。

（ト高時天狗を見て、）

お、汝は春日の田樂法師南圓坊か、よく參つた。

摩大薩へ又もこなたへ突然と、怪しの姿顯はず天狗、

トドロくくのやうな風の昔稲光りにて、上手へ同じこしらへの天狗すつぽんにて出る、高時見て、

お、住吉の田樂法師、東江坊參りしか。兩人共待つて居

つた、さ、近う參れく。

りるへ見返る後に數多の天狗、高時ぞくく打ち悦び、

此の内やはり風の音にて、後上下へ同じこしらへの天狗出で、下に居る。

高時左右を振返り見て悦び、

や、何時の間にか兩派の法師、打ち揃うて、よく參つたく。

ト床下座好みの方にて、高時天狗の言ふを聞く思入あつて、

なに、神樂唄になぞらへて浪華江といふ新曲を物せしとは面白し、幸ひ徒然の折なれば、これにてそれを舞うて見せ

やれ、なに、その浪華江を予に教へ、祕曲を傳授なすと申すか、お、學ばうともく、予も此の程より稽古の功積み

餘程上達なしたるぞ。お、高足を履き劍を抜き、品玉をいだすなどは下賤の業にて見所なし、神樂催馬樂などによ

り唄ひ物のある方が遙に勝りて興深し春日住吉兩派の者が、物せしとあるからは定めて巧みなことであらう、其の新曲

を勤めて見せよ、さあく早く所望ぢやく。

摩大薩へ所望々々と高時が、促す詞にうなづき合ひ、

りるへ聲うら枯れし天狗等が、唄ふ唱歌ぞ怪しけれ。トこれにて前の天狗二人立上り、前へ出る、拍板の入りし鳴物になり、

摩大薩へ住の江の松はとこしなへにいと古し、松はとこしなへにいと古し、おんそれなく。

りるへ神の御恵み海より深い、世さは静にはれ波た、ず、摩大薩へ心安らに、安らに民も、枕ようして夜さいねる、おんそれなく。

ト天狗二人にて掛り、よき程に高時心浮れし思入にて此の中へ入り一緒に振りになる。

りるへ頼み甲斐なの浮世の中は、

摩大薩へ變り易さよ秋の空、あはれ月影雲間に入りて、

りるへ時雨さそうて、さそうて風が、

摩大薩へ梢落とせば、はれ波立ちて、

りるへ蘆の葉音のさわがしく、

摩大薩へ音におどろくむら／＼鷗、

りるへ共に音を鳴く、音を鳴く干鳥、

ト此の内高時二人の天狗を相手に振りあつて、蘆の葉音の騒がしくといふ頃より、薄ドロ／＼稲光をあしらひ、むら／＼鷗といふ件へ四人の天狗飛んで出で、ちよつと振りあつて浄瑠璃の切れ大薩摩竹本の打合せの合方へ凄き詠への鳴物を冠せ、天狗高時を悩ますことあつて、皆俯伏しになる、高時見えぬ思入にて尋ね廻る、天狗出で邪魔をなす、始終狂ひのやうなる烈しき振りあつて高時疲れし思入、此の内下手より以前の衣笠○△の侍女二人雪洞を持ち出來り、下手杉戸の隙より内を覗き、びつくりなして下手へ逃げてはひる。

りるへ風に揉まれて飛び交ふさまは、

摩大薩へ實にや軍も斯くばかり、あはれ斯くやと濤標、

ト此の内高時だん／＼に疲れし思入にてどうとなる。

りるへ天狗は笑壺に手拍子打ち、

へ天王寺のや、妖靈星を見ざるか／＼。

トこれを繰返し囃し立てる、高時立上るを突倒して囃し立てる、又高時立上るを引倒して囃し立てる、高時ひよろ／＼となり苦しき思入、此の時下手より以前の城之介

入道先きに近習四人雪洞を持ち、衣笠附添ひ出で、城之介戸の隙より内を窺ひ、

城之いでや化生を見顯はさん。

摩大薩へいふ聲聞きて天狗等は、掻き消す如く失せにけり。

トドロ／＼になり上手へ詠への煙りを出し、天狗は此の内へ消える。高時は俯伏になり居る、下手杉戸を明け、

城之介入道先きに皆々内へはひり、
(308—309頁)

城之介と近習四人がやってきて、城之介が「化生を見てやろう」というと、天狗たちは雲散霧消してしまふ。しかし、あとにはおびただしい獣の足跡が残っており、高時も「これに獣跡残りあれば天狗が来るに疑ひなし、北條九代連綿たる執權職高時が、好める道に魂奪はれ、魔界の天狗に欺かれしか。」と齒噛みして悔しがる。そこへ、天狗の笑い声が稲光とともに響き渡る。

原作の『太平記』と比較してみよう。原作では高時の舞をもてはやした田楽法師の正体が天狗であったという設定であるが、黙阿弥版では、最初から高時の舞を見ていた田楽法師と田楽法師に化けた天狗は別物という設定となっている。高時が舞っている時に灯火が消えて稲光が走り、次々に新たに田楽法師がやって来るが、この新たに訪れた田楽法師の正体が天狗という設定である。

また、原作では高時が舞い、天狗は歌っているが、黙阿弥版では高時とともに天狗も舞い、天狗は高時の舞の邪魔をしたあげく何度も突き倒しさえする。

原作では、宴に同席していなかった「ある女房」が、高時の舞に合わせて歌う田楽法師たちの歌があまりに面白いので、障子の

破れ目からのぞいてみると、「異類異形の鳶」が山伏の姿で現れていたことになっている。天狗は、空中を飛翔することから、鳶のイメージで捉えられることが多かったのである。一方、黙阿弥版では、消えた灯火の代わりに雪洞を持ってきた衣笠の侍女二人が部屋の中をのぞき、歌い踊る天狗を見て驚く。

また、原作では「ある女房」が城入道（安達時顕）に報告し、それを聞いた城入道が太刀を取って荒々しく入ってきたところ、天狗はかき消すように消えている。一方、黙阿弥版では、侍女二人から天狗がいるという報告を受けて、城之介を先頭に衣笠と侍女四人が部屋にやってくるが、城之介の「化生」を見てやろうという言葉を聞いて、天狗は消え失せる。

総じて黙阿弥版は、怪異な事件が原作と比して事細かに描かれており、漸層的に怪異な事態を進行させてゆき、少しずつ現実感を醸成しながらドラマを盛り上げてゆく構成となっている。

城之介の台詞に天王寺の妖霊星の話が登場するが、これは、『太平記』においてこの物語の後に妖霊星の歴史的な記述があることと対応している。

活歴史物である「北条名家九代功」に対して、怪異を描いた謡曲を歌舞伎化した松羽目物も存在する。「土蜘蛛」「茨木」「船弁慶」「紅葉狩」の四作である。これらの他にも、怪異を描いた作品としては、『平家物語』を原拠とした「戻橋」、そして民間伝承を原拠とした「一つ家」がある。

(2) 「土蜘蛛」

「土蜘蛛」は、「新古典演劇十種」（歌舞伎で、市川家の歌舞伎十八番に対抗して、5世および6世尾上菊五郎が選んだ尾上家の家芸十演目。）の一作として作られた脚本である。歌舞伎舞踊のうち長唄であり、河竹黙阿弥が作詞し3世杵屋正次郎が作曲した。明治14年（1881）東京新富座で初演される。この話の元は『平家物語』であるが、直接の原典は謡曲の「土蜘蛛」であり、これを舞踊化した松羽目（まつばめ）物である。源頼光が病に伏すがその原因は土蜘蛛であった。平井保昌と四天王は、祈祷に訪れていた老僧がその化身だと見破って切りつけ、逃げた土蜘蛛の住処を襲って退治する。

この作品以降、浄瑠璃・所作事として作られた作品が多くなる。黙阿弥は、近代の怪異を圧殺する風潮に対して、「神経病」と言う時代に迎合した形で怪異を描くよりも、古典の世界の様式美として舞踊によって怪異を描く方向に向かっている。

河竹登志夫『黙阿弥』には、「黙阿弥の芝居は残り、新古演劇十種や新歌舞伎十八番などのお家芸に選ばれ、繰り返し上演されている。黙阿弥の芝居の内かなりのものが明治以降に書かれたというのも、驚きである。明治政府の演劇改良運動によって、庶民の娯楽であった歌舞伎が上流階級の観劇にふさわしいモノに改変される過程で多く書かれたのが、能・狂言を題材に能舞台を真似た舞台で演じられる松羽目物で、黙阿弥の書いた土蜘蛛や船弁慶、釣狐、茨木もその流れだったりするのだ」とある。

「土蜘蛛」の物語は、病で床に就く源頼光と平井保昌の会話に始

まる。

頼光と保昌の会話で、薬によって頼光の病状が好転しなかったため、物の怪の祟りによるものではないかと高僧たちに祈祷させたところ、良くなつたというこれまでの経緯が語られる。

やがて頼光の休息のために保昌が下がり、代わつて侍女胡蝶が現れる。

胡蝶が下がつた後、頼光は急に病状が悪化し、そこへ西塔に住むと言う謎の僧が出現する。西塔は比叡山延暦寺の西部地域であり、寶幢院は西塔の総称である。

謡曲「土蜘蛛」では、上歌の間に胡蝶が姿を消し、土蜘蛛と入れ替わる。しかし、胡蝶が姿を消すことは謡われず、そのままシテの謡につながる。これが、「土蜘蛛」では、次のように描かれる。

へ月清き夜半とも見えず雲霧の、掛れば曇る心かな、へ今
まで明き燈火の、影さへくらし枕邊に、一人の僧の佇みて、

（ト此内花道より、僧智籌出で来り、舞台へ佇みて、）

智籌 いかん頼光、御心地は何と御入り候ぞ。

へ尋ぬる聲に現とも、夢ともわかず打見やり、

頼光 あ、ら心得ぬ事にて候、人に變れる僧侶には、何れよりして參られしぞ。

智籌 これは比叡山の西塔、寶幢院の學寮に住む、智籌と申す僧にて候。

頼光 何ゆゑあつて夜陰に及び、我が館へ參られ候ぞ。

智籌 承はれば頼光朝臣は、重き病に臥したまひ、醫療業を盡すと雖、其効驗あらざるゆゑ、物の怪の祟りとして、諸寺諸山

にて高僧貴僧が、惡鬼退散の法を修せど、未だ全快あらざるよし、猶も祈念をいたさばやと、今宵館へ參りて候。

頼光 それはよくこそ參られたり、諸寺諸山の其内にもわきて叡山は尊き御寺、國家鎮護の祈願所にて然も王城の鬼門に當れり。

智籌 東北の間鬼門の方に一字を建立なす事は、古き例のある事にて、既に天竺の靈鷲山は、王舎城の鬼門に當り、又唐土の天台山は長安城の鬼門に當り、我が日の本の比叡山は平安城の鬼門にして、朝廷本命の靈場なり。

頼光 見受けし所高僧には道德備はる权者と覺ゆ、定めて壮年の頃よりして佛法修行の其爲に、諸國を經歷召され候はん。

智籌 如何にも朝臣の仰せの如く、我も由ある武士の家に産れ候ひしが、父なる者の菩提の爲、一子出家なす時は九族天生ずといふ、教へに依つて剃髮なし、

へ身は雲水の定めなく、樹下石上に墨染の、衣露けき旅の空、

へきのふは法の陸の奥、千松島に杖を曳き、けふは行方も不知火の、心筑紫に足を止め。

春の花秋の月、人は稱へて愛れども、

へ塵の浮世を遁れては、樂しからねば目も止らず、降り積む雪に薪水の、行を我が身にたくらべて、道なき山に分け登り、又は船なき川を渡り、風に吹かれ雨に打たれ、難行苦行の功積みて、比叡山へ立歸り、遊學なして候なり。

頼光 斯かる尊き高僧の祈念を受くるは忝けなし、いざ修法を頼みたし。

智籌 それは何より易き事なり、五大明王を本尊となし修するなり。

頼光 其五大明王とは。

智籌 東方降三世明王、南方軍吒利夜叉明王、西方大威徳明王、

北方金剛夜叉明王、中央大聖不動明王、是れ五大明王にして
 東西南北中央と、五ヶ所へ五壇を設け、護摩を上げて修するなり。

頼光 して、降三世明王とは。

智籌 尊容三面八臂にして、三世は所謂貪婪痴、此三毒を降する
 ゆゑ降三世と是れを名付く。

頼光 して又軍吒利夜叉明王とは。

智籌 尊容則ち六臂にて、左りの肩に輪寶あり、一切の阿修羅悪
 鬼神を擡伏す。

頼光 して大威徳明王は。

智籌 尊容三面六臂にして、悪龍毒蛇を擡伏す。

頼光 してく金剛夜叉明王は。

智籌 尊容同じく三面六臂、左りの御手に輪寶を捧げ、右の手に
 矢を持したり。

頼光 中央不動明王は。

智籌 尊容憤怒の形相にて、左りに慈悲の繩を携へ、右に降魔の
 利劍を持ち、一切の鬼魅諸障惱者を降伏す。

頼光 天部の神にも本地ありと、承はり及びしが、五大明王にも
 本地ありや。

智籌 五大明王にも本地あり、降三世は東方の阿闍佛、軍吒利夜
 叉は南方の寶生佛、大威徳は西方の阿弥陀佛、金剛夜叉は

北方の釋迦佛、不動明王は中央大日如來の教化大慈大悲の
 誓願なり、斯かる尊き明王を本尊となし奉り、護摩を上げ

て祈念なせば、悪鬼羅刹魑魅魍魎天魔破句の鬼神なりとも、
 修力を以て立所に退散なさん事疑ひなし。いでく五大明
 王を祈りて、障礙を拂ひ申さん。

へ最多角の珠數携へて、頼光朝臣の御前近く、進み寄りし
 其影の、最も怪しく見えければ、

ト此内智籌、頼光の前へ寄添ふ。

(326—327頁)

五大明王を本尊として、悪魔・外道・怨敵などを鎮めるために
 行う修法は降伏法であり、それぞれの明王を個別に祀って護摩修
 法を行う場合は五壇法と言ひ、国家安穩を祈願するのが通常であ
 る。ここでは、個人の病氣平癒であるにもかかわらず五壇法によつ
 て源頼光の病氣平癒を祈念するという。確かに源頼光は朝家の守
 護をする武士団の棟梁であり、国家の重要人物ではあるものの、
 頼光宅で国家安穩の護摩を焚くというのは大仰ではないだろうか。
 しかも、当初は五大明王を祀って五壇の護摩において修法する
 と言っていたのに、智籌は五大明王に祈って障礙を拂うと言いな
 がら頼光に近付いてくるのである。案の定、僧の影は僧ではなかつ
 た。

刀持 なうく我が君、御油斷あるな。

頼光 なに、油斷すなとは。

刀持 火影にうつる僧の姿、いとく怪しく存じ候。

へ怪しむ詞に驚きて、袖を返せば傍なる、燈火はたと消え

にける。

頼光 風も吹かぬに燈火の、消えしは化生の業なるか。

智籌 やあ愚なる仰せよな、我がなす業と知らざるか。

頼光 左いふ汝は何者よな。

智籌 我が背子が来べき宵なり、さ、がいの、

頼光 蜘蛛の振舞かねてより、

へ知らぬといふに猶近附く、姿は蜘蛛の如くにて、へ掛くるや千筋の絲筋に、五體を包み身を苦しむ。（ト此内智籌巢を出す。）

へ頼光化生と見るよりも、枕邊にある膝丸を、抜き開いて丁と切れば、へ身を躍らして背くる所を、續けざまに薙ぎ伏せつゝ、得たりや應と罵る聲に、へ又立掛れど、膝丸の、劍の威徳に叶はじと、形は消えて失せにけりく。（ト此内智籌又巢を出し、立廻りあつて花道へ這入る。）（328頁）

ここに登場する古歌は、『日本書紀』『古今和歌集』に掲載されている和歌上の句である。衣通郎姫が允恭天皇に対して詠んだ恋歌「我が背子が来べき宵なりささがにの 蜘蛛のふるまひかねて知るしも」である。

膝丸という刀は、源氏に伝わる名刀で、平安時代に源満仲が作らせたとされている。この土蜘蛛の逸話において土蜘蛛を切ったことから蜘蛛切に変わるが、その後も、他の逸話を受けて吠丸、薄緑と変化した。この次第は、『平家物語』（『屋代本平家物語』『百二十句本平家物語』『源平盛衰記』）「劍の巻」に登場する。

へ君の御聲訝く、詰所に控へし保昌が、押取り刀に馳せ来り、

（ト下手より保昌出で、）

保昌 只今君の御聲高く、詰所へ聞え候程に、急いで是れへ参りて候。

頼光 よくぞ保昌参りたり。

保昌 して、何事にて候ぞ。

頼光 苦しからず候ゆゑ、語りて聞かせ申すべし。保昌近う来り候へ。

保昌 心得申して候。（ト合方になり、）

頼光 扱も今宵夜半の頃、誰とも知らぬ僧の来りて、我が病を問ふゆゑに、夜陰に及び何れより、僧には是れへ来りしと、尋ね問へば殊勝氣に、比叡山の西塔より物の怪の祟りをば退けん爲来りしと、申す詞の訝しさに、詞巧みに佛門の祈念の法を尋ねしに、問ひに任せて一々答へ、聽て障礙を拂はんと、我を目掛けて立ち寄りし、僧は其儘七尺ばかりの、蜘蛛の形も鬼形に變じ、我に千筋の絲を繰掛け五體を包み、身を苦しめしを事ともなさず、枕邊の膝丸取つて切附けしが、化生は恐れて忽ちに掻き消す如く消え失せたり。

保昌 さては今宵我が君に、障礙を爲さんと来りしは、年経る蜘蛛で候ひしか。

刀持 火影にうつる僧の影いとも怪しく見えけるゆゑ、君にお知らせ申して候。

保昌 いしくも汝認めしぞ、天晴なりける手柄なり。

頼光 此程よりの瘡病は、彼れが障礙をなしつるか、思へば不思議

議な事にて候、かやうな事に先蹤ありや。

へ問はせたまへば保昌は、打ち領いて座を進み、

保昌 斯かる例もなきにあらず。

へ昔人皇の初めとかや、紀伊國名草の郡、高野の林といへる所に、二丈餘りの蜘蛛あり、手足は長く力量勝れ、網を張ること數里にして、往来の人を慘害なす。

へ是れに依つて勅命下り、官兵彼の地へ馳せ向ひ、四方へ

鐵の網を張り、

鐵湯を沸して責めしかば、

へ何かは以て堪るべき、蜘蛛は悶え苦しみて、終に其身は

焼け爛れ。

果敢なく命を捨てし由、故老の者の談柄に承はりて候なり。

頼光 それに劣らぬ蜘蛛の障礙を、今宵切拂ひ候ひしは、是れぞ劍

の奇特ゆゑ、今日よりして膝丸を、蜘蛛と名附くべし。

保昌 今に始めぬ君の御威光、又膝丸の劍の奇特、莠々御家の譽

れなり。

頼光 切附けし時、正に手應へなしたれば、血汐は流れあらざるや。

保昌 仰せの如く此邊に怪しからず血の滴り候、是れを慕ひて障

擬なす、蜘蛛の在所をたんだいて、退治なさうと存じ候。

頼光 いしくも保昌申したり、血汐を慕ひ行方を尋ね、

保昌 四天王と諸共に、

頼光 疾くく蜘蛛を退治候へ。

保昌 心得申して候。

へ君命受けて保昌は、勇み進んで走り行く。（ト保昌下手

へ這入る。）

へ頼光朝臣も席を替へ、奥殿深く入りたまふ。（ト頼光太

刀持下手へ這る。）

へ程もあらせず廣庭へ、土蜘蛛退治の供觸れに、從者の兵卒
立ち出で、
(328—329頁)

保昌のセリフにある古代のまつろわぬ民としての土蜘蛛についてのくだりは、謡曲にはない。しかしながら謡曲においては、土蜘蛛征伐の行く先が葛城山になっていて、後の土蜘蛛との戦いにおいて、土蜘蛛のセリフとして古代の土蜘蛛の物語が歌われている。

「紀伊の國名草の郡、高野の林」と土蜘蛛の故事が語られる部分は謡曲にはなく、『源平盛衰記』十七「謀叛素懷を遂げざる事」に、「日本磐余彦尊の御宇四年己未の歳の春、紀伊國名草郡高野の林に土蜘蛛ありき。身短く手足長くして力人に勝れたり。皇化に従はざりければ官軍を差し遣して是を攻めけれども、誅する事能はず、住吉大明神、葛の網を結ひて遂に覆ひ殺したまへり」、『太平記』卷十六「日本朝敵の事」に「されば天照大神よりこのかた、繼体の君九十六代、その間に朝敵と成つて滅びし者を數ふれば、神日本磐余彦天皇御宇天平四年に、紀伊國名草郡に二丈余の蜘蛛あり。手足長くして力人に越えたり。網を張る事數里に及んで、往来の人を殘害す。しかれども官軍勅命をかうむつて、鉄の網を張り、鐵湯をわかつて四方より攻めしかば、この蜘蛛ひに殺されて、その身つだつだに爛れにき。」とあるのによつたと思われる。

その後の兵卒たちのコメディアスなやり取りの部分は、大衆芸

能である歌舞伎らしい。

蜘蛛には吸血する種類は無いが、ダニは節足動物門鋏角亜門クモ綱ダニ目に分類され蜘蛛の仲間であることと、蜘蛛の一種で地下に穴を掘って住むジグモがいること、これらから吸血する土蜘蛛という発想が生まれたのではないか、と思われる。

土蜘蛛の血の跡をたどって、平井保昌と頼光四天王の一派が土蜘蛛塚に到着する。傷の痛みにうめいている土蜘蛛の声から所在を知ると、一派は塚を崩し始めた。すると、塚の中から土蜘蛛が出現する。

へ俄に地中鳴動なし、四方へ掛けし蜘蛛の圍より、火焰を放ち水を吹き、左も怖しき有様も事ともなさず大勢が、忽ち崩す古墳の、岩間の蔭より土蜘蛛の鬼神の姿は顯れたり。

ト此内軍卒四人立掛る。蜘蛛の左右を破り、絲を打掛ける。是れにてどろ／＼になり、軍卒目くるめきし思入にて、前の二人たち／＼として左右へ見事に轉る。是れと一緒に正面の巢を引破り、土蜘蛛の精黒頭唐織、色なしの着附、錦の法被、紺地金模様様の半切、錦の打杖を持ち出できつと見得。これにて保昌四天王立掛り、きつとなつて、

保昌 さてこそ怪しき鬼形の變化、そもそも汝は、

五人 何者なるぞ。

ト五人左右より詰寄る。土蜘蛛の精打杖を構へきつと思入、鼓唄掛りになり、

へ我を知らずや其昔、葛城山に年經りし、土蜘蛛の精魂なり。

土蜘蛛

ト軍卒二人掛るを投げのけ、打杖を振上げきつと見得。此日の本に天照す、伊勢の神風吹かざらば。

へ我が眷族の蜘蛛群り、六十餘州へ巢を張りて、疾くに魔界になさんもの、へ思ひし望み叶はねば、先づ頼光を惱まさんと、障礙をなせし甲斐もなく、我が命魂を斷たんとや。

保昌

ト此内土蜘蛛精打杖を持ち、軍卒を遣ひよろしく振あつて、普天の下率土の濱、王地にあらざる所なし、

綱

此土にあつて日の本を、魔界になさん汝が巧み、

貞光

忽ち天罰その身に報い、

季武

命魂斷つも自業自得。

保昌

疾く疾く變化を討取り候へ。

四人

心得て候。

土蜘蛛

やあ、我を討たんなど、とは小賢きものどもよ、蟲類なれど千歳の年經し蜘蛛の通力自在、見よ／＼今におのれらが、五體へ千筋の絲を練掛け、手足を包み動かさじ。

保昌

假令如何なる通力あるとも、何條討てぬ、

五人

事あらん。

保昌

いで、命魂を斷つてくれん。

へ蜘蛛の精靈練溜めし、千筋の絲を右左り、投げ掛け／＼白絲の手足に纏はり五體を包めば流石の保昌四天王等も、自由に動くこと叶はず。

ト此内鳴物にて土蜘蛛の精は打杖、四天王は太刀を抜き切つてかゝり、立廻りの内土蜘蛛の精千筋の絲を度々打掛け、四天王絲に包まれ困る思入、土蜘蛛の精つか／＼と花道へ行く、軍卒追掛け行き立廻りあつて、

へ樹木へ掛けし蜘蛛の圍へ、飛びかふ胡蝶や蜻蛉の、掛りし如く身動きならず、

ト四人を相手に立廻り、此内左右へ絲を打ちかけ立廻りよろしくあつて、舞臺へ來り、四天王立掛りて、へ暫し困じていどみける。

ト此内土蜘蛛の精は能の振と歌舞伎の立廻り、此の仕組よろしくあつて、

へされども人々少しも屈せず、神國土地の恵みを頼み、彼の上蜘蛛の中に取込め、大勢亂れ掛りければ、妖魔の術も消え失せて、劍の光りに恐るゝを、得たりや得たりと附入りく、難なく蜘蛛を討取りて、

ト舞はたらきになり、土蜘蛛の精、保昌激しき立廻りよろしくあつて、保昌に切られ飛上り、尻ガバにどうと下にゐる。

へ譽れを世々に残しける。

ト皆々引張りよろしく、片シヤギリ、カケリにて、

幕
(331—332頁)

黙阿弥の『土蜘蛛』は謡曲「土蜘蛛」のストーリーに忠実のようだが、細部において異なる。例えば、謡曲では、土蜘蛛は唐突に法師になりすまして現れ、頼光をにらみ据えて、ずかずかと病床に近付いてきて、「お加減はいかがかな。」と頼光に声をかける。一方、黙阿弥の『土蜘蛛』でも、僧は唐突に現れるが、病氣平癒を祈禱する比叡山の智籌と名のり、もっともらしい説明をする。

この怪僧は、『平家物語』(『屋代本平家物語』『百二十句本平家物語』『源平盛衰記』)「劍の巻」に登場する者がモデルであろう。最も普及している覚一本にはない。ともあれ、唐突に僧が出現すると怪しい変化の者という感がするが、黙阿弥版では僧は具象化されているために怪しくはあつてもリアリティがある。何よりも、『平家物語』では怪僧は身長7尺(約2.1メートル)であり、『土蜘蛛草紙』の巨大な化人に近く、両者とも土蜘蛛ではなく「山蜘蛛」とされている。

また、土蜘蛛は、古代日本における、天皇への恭順を表明しない土着の豪傑などに対する蔑称であつた。中でも、奈良県の大和葛城山にいた土蜘蛛は、特によく知られている。神武天皇が土蜘蛛を捕え、彼らの怨念が復活しないように頭、胴、足を切断し、別々に埋めたという。

土蜘蛛退治についても、謡曲では、葛城山の蜘蛛塚まで退治しに行くのは独武者とあり平井保昌とはされていない。本来は独武者とは「固有名詞ではない」ことから人物は特定されていない。一方、黙阿弥の『土蜘蛛』では独武者は平井保昌とあり、退治に行く先は京都「東寺の裏手」の古塚となつており、征伐には保昌のみならず頼光四天王も同行する。

堀川通り一条東入る南側にあつたと言われる源頼光の屋敷から葛城山まで土蜘蛛退治に行くのは、かなりの時間と労力を要する。現在でも徒歩で約19時間というから、道の整備されていなかった当時はもっとかかったであろう。一方、東寺の裏手は平安京の中心であり、現在でも徒歩1時間余りの距離である。

総じて黙阿弥作品では、謡曲の夢幻性・幽玄性から生じる幻想

的であるゆえにリアリティが稀薄な表現をはつきりと具体的かつ明確にさせ、また不自然な部分を自然な形に修正してすつきりさせている。夢幻・幽玄からリアリズムへというのが、怪異の方向性であろう。

（3）「茨木」「戻橋」

「茨木」（明治16年4月、新富座）、「戻橋」（明治23年10月、歌舞伎座）、「一つ家」（明治23年4月、市村座）は、「新古演劇十種」の一つである。

「茨木」と「戻橋」の原話は、『平家物語』剣の巻下にある渡辺綱と一条戻橋に出現した鬼の茨木童子の話である。ただし「戻橋」は全編が『平家物語』剣の巻下によるのに対して、「茨木」の方は『平家物語』剣の巻下だけではなく、そこから創作された謡曲「羅生門」にもよっていると大きい、と思われる。

「戻橋」では、渡辺綱が鬼に遭遇し、鬼の腕を斬り落とす。この場面の舞台は一条戻橋であり、『平家物語』剣の巻下も舞台が「戻橋」でありストーリーの概要も似ていることから、「戻橋」の原作は『平家物語』剣の巻下であろう。

この後日談である「茨木」は、鬼が綱の乳母に化けてやってきて腕を奪い去る『平家物語』剣の巻下にある鬼が腕を取り返しに来る話と類似しているが、そこに至る経緯や鬼の腕を切り落とした舞台が異なっている。渡辺綱は平井保昌と口論の末、羅生門を訪れ、そこで鬼に襲われている。一方、謡曲「羅生門」は、『平家物語』剣の巻下の渡辺綱と鬼との戦いまでの話をもとに、舞台を一条戻橋から羅城門に変えて創作されている。

つまり、「戻橋」は『平家物語』剣の巻下と、「茨木」は『平家物語』剣の下及び謡曲「羅生門」と比較検討することにより、黙阿弥の創作の特色がより明確になると思われる。

ここで『平家物語』「剣の巻」について述べておく。剣の巻は、平家とともに海中に沈んだ草薙の剣の歴史をたどるところから始まる。上・下に分かれているが、上は草薙の剣の物語であるため「自然であり、多くの諸本に見え」る。一方、下は『源氏名剣篇』というべく、派生的話題で、底本・屋代本のみに見え、屋代本は上下とも本文から外して別記扱いとしているから、下篇は底本の特色といつてよい。」と『新潮日本古典集成 平家物語下』に注記されている。この底本とは、「百十二句本」である。

それでは、この『平家物語』剣の巻下、及び謡曲「羅生門」に登場する渡辺綱と茨木童子の物語と黙阿弥作「茨木」「戻橋」を比較してみよう。

『平家物語』剣の巻下には渡辺綱が源頼光の使いとして一条大宮に行く理由は書かれていないが、黙阿弥作「戻橋」では「さる頃深く語らひし、維仲卿の姫君へ、便りもなさで在せしが、「武威逞しき我が君も、戀は意外のものにして、かね／＼語らひたまひたる、維仲卿の姫君へ、密々の仰せ蒙りて某使ひに参りし」とあり、源頼光の恋の使いであると示される。また、渡辺綱はこのとき単騎で向かっていたが、「戻橋」では二人の家来を連れている。綱と鬼が化した女との出会いも、女の方から声をかけているのを、綱の方から声をかける形となっている。綱が女を馬に乗せて走る場面では、歌舞伎の性質上当然のことながら、二人は連れ立って歩いている。女が鬼の正体を現し襲いかかる場面でも、原作では、

女はいきなり「綱が髻ひつ掴んで、乾をさして飛んで行く」。だが、「戻橋」では綱が事前に女の正体を見破っていて、女も綱と知っており綱に恋しているといい言い寄った際に、綱に正体を指摘されて「綱が襟上むんずと掴み。／＼（中略）…綱の襟上を取り、きつと見待。／＼砂石を飛ばす暴風に、つれて虚空へ引き立つれば、／＼ト仕掛にて、兩人をよき所まで引上げる。」と舞台装置上可能な形に修正されている。

総じて物語を劇化するにあたって必要な形に修正した部分以外については、男女の恋模様と織り交ぜながら怪異譚が描かれる形となっている。

綱は鬼に襲われ腕を切り落とすが、その後日談は、黙阿弥作では「茨木」となる。

綱の物忌については、源頼光が鬼の腕を見て驚いてわざわざ播磨の安倍晴明を呼び出して聞く形が、「茨木」では主命により安倍晴明の勘文により物忌に入ったという。しかも物忌の日は七日間のところが、一七日間の物忌であるが「悪鬼は七日の内に來たりて仇をなす」という。この作品の設定については、謡曲『羅生門』の影響の方が強いようである。謡曲『羅生門』は、主人の源頼光の前で、鬼神が住むといわれる羅生門のことで平井保昌と言い争い、日が暮れると人の寄りつかない羅生門に行つて標識を立ててくると宣言する。源頼光もそれを支持し、綱は羅生門に標識を立て、襲ってきた鬼の腕を切り落とす。「茨木」では、標識の話は無いものの、謡曲『羅生門』と同様に保昌と口論した後、夜な夜な変化の出るといふ羅生門に赴き鬼の腕を切り落とす。

この後は、『平家物語』と同様のストーリーとなり、鬼の化けた

伯母が来訪し、はじめは物忌を守つて伯母と会うのを拒否していた綱であるが、伯母の懇願によりついに物忌を破つて伯母に会い、鬼の腕を伯母に見せてしまう。鬼は腕を奪つて逃げる。

この際に、原作では、人を介さず綱が直に門の内側より答えて拒否するが、「茨木」では当初家来が伯母の頼みを拒否し、それを聞きつけた綱がさらに拒否するという展開になっている。伯母の口説き文句も原作では、産れた時から大切に育ててここまで大成したのになんという言い方が、遠路はるばる来たのにか血筋なのに、という言い方になっている。

伯母を家に入れてから鬼の正体を現し腕を持って逃げる部分は、「茨木」ではかなり詳細に描かれている。伯母の要望で綱が鬼の腕を取つた経緯を話した後、綱が伯母に酒を勧め、伯母が酒を飲んだ後、今度は家来が伯母に舞を所望する。伯母は舞つた後に、鬼の腕を見せてくれという。伯母は鬼の正体を現し腕を持って逃げるが、家来たちは怯えており、綱が家の外で鬼と対決する。事細かにドラマ化することにより、鬼の恐ろしさが一層引き立つ一方、綱の勇猛さも引き立つ構成となっている。

(4) 「一つ家」

「一つ家」は話型が共通であるものの、能においては「安達ヶ原」あるいは「黒塚」の物語の舞台は現在の福島県にある奥州安達ヶ原を舞台にしたものであるのに対して、浅茅ヶ原が舞台となっている説話の物語である。浅茅ヶ原の一つ家は、浅草観音の靈驗譚から直接に創作されたと考えて良いだろう。

ストーリーは、浅茅ヶ原のあばら家に住む老婆が、旅人を泊め

ては殺害して金品を奪って死骸を捨てていたが、その娘は母の悪行を悲しんでいた。ある時、巡礼の少年がやって来て、その少年を老婆が泊めて殺害しようとする。しかし、老婆の娘は、少年に好意を抱き、少年を助ける。老婆は娘のために極悪非道をなしていたと怒り、娘をなぐり殺そうとするが、その時、少年が姿を現して観音菩薩の姿となり老婆を諭し、老婆は改心して自らの罪業を償うために池に身を投げる。しかし、この一連の物語は佐渡七という男が、国芳の描いた一つ家の額を見ているうちに居眠りしてみた夢だった、という落ちになる。

『上野浅草むかし話』によれば、旅人は自ら浅茅ヶ原にある一件のあばら家を見つけて宿泊を願い出るといふ形で描かれ、黙阿弥版に登場するあばら家へと導いてわけまえにあずかる二人の男は登場しない。また、老婆は旅人を殺害して死体を近くの池（姥ヶ池）に捨てていたというが、これも黙阿弥版では死骸は野中に埋めてしまうとなっており、異なっている。

浅草観音が変化した旅の美しい少年は、黙阿弥版では都より心願があつて関東の霊場を巡拝するためにやってきたと詳述されている。最も大きな相違点は、この少年を助けるために老母の美しい娘が身代わりになって死んで老婆を諭そうとするが、黙阿弥版では娘が少年を逃がし、娘も身代わりとはならず無事という点である。また、結末として少年が仏様の姿を現し、娘の死に泣き叫ぶ老婆を改心させ、老婆は龍に化身して五色の雲に乗り池の中へ消えていくのに対して、黙阿弥版では、少年が観音菩薩の化身の姿を現して諭したことにより老婆が改心するところは同じだが、これまでの罪業を償うために老婆が池に飛び込んで死した後、す

べてが夢であったとわかるという結末となっている。霊験譚なるものが受け入れられにくい時代を意識して、夢落ちをつけたのであろう。

注

- テキストは、『北条名家名代功』『土蜘蛛』は『明治文学全集9 河竹黙阿弥集』（筑摩書房 昭和41年）、それ以外は『黙阿弥全集』第20巻、河竹黙阿弥著、河竹糸女補、河竹繁俊編、春陽堂、大正13～15年
- (1) テキストは、『新編日本古典文学全集（54）太平記（一）』長谷川瑞訳、小学館、平成6年
 - (2) テキストは、『土蜘蛛』竹本幹夫訳、檢書店、平成13年
 - (3) 『黙阿弥』河竹登志夫著、文芸春秋、平成5年
 - (4) テキストは、『平家物語（下）』新潮日本古典集成 47 水原一著、新潮社、昭和56年
 - (5) テキストは、『新定源平盛衰記（第2巻）』水原一、新人物往来社、昭和63年
 - (6) テキストは、『新編日本古典文学全集（54）太平記（一）』
 - (7) テキストは、『平家物語（下）』新潮日本古典集成 47
 - (8) テキストは、『決定盤謡曲観世流小謡集』キングレコード、平成11年
 - (9) 謡曲「安達原・黒塚」のテキストは、『安達原・黒塚』竹本幹夫訳、檢書店、平成12年
 - (10) 『上野浅草むかし話』末武芳一著、三誠社、昭和60年

Ghost Stories and Strange Phenomena in Dramas by Mokuami Kawatake,
Their Change after the Meiji Restroration (3)
The History of Japanese Ghost Stories in Modern Literature (10)

MIURA, Masao

(110)

キーワード：河竹黙阿弥、怪談、怪異

Key words : KAWATAKE Mokuami, ghost story, strange phenomena